

<学会レポート>

第12回医療の質・安全学会学術集会

2017年11月25日・26日 於 幕張メッセ国際会議場

旗手 俊彦（札幌医科大学医療人育成センター）

第12回医療の質・安全学会学術集会は、2017年も、2,700人を超える参加者を得て盛大に開催された。第12回のテーマは「医療の質と安全を支えるコミュニケーション」であり、医療安全に関する個別的なテーマはもとより、コミュニケーションスキルやコミュニケーション研修に関するセッションが多く設定された。特に第12回学術集会の特徴は、コミュニケーションといっても、医療者間のコミュニケーションというよりは、医療者と患者のコミュニケーションに関するセッションが多かったのが特徴であった。その例として、医療事故に関する患者への open disclosure（正直な情報公開）が取り上げられことは大変新鮮であった。また、医療の質・安全学会が推進している患者とのパートナーシップの取り組みを紹介したシンポジウムも組まれた。そのうち近畿大学の取り組みとして、ホスピタルアートの中に「あなたのひと言」という掲示板を設置し、患者による投書内容を掲示している例が報告された。また、昨年に引き続き、Choosing Wiselyのパネルディスカッションも設けられ、特に抗菌薬と polypharmacy に焦点を絞り、どのようにエビデンスを患者と医療者が共有するか議論もなされ、コミュニケーションのみならず、多剤耐性菌出現のコントロールという正に医療安全、医療の質にとっても有意義な議論がなされた。

さらに、第12回学術集会の特徴として、医療の質・安全に関する教育研修に関するセッションが多く設けられことが挙げられる。報告にあたった多くの医学・医療教育機関では、医療スタッフ対象の教育研修はもちろんのこと、卒前の、しかも低学年の段階から医療安全教育を実施していることが報告された。特に、ノンテクニカルスキルの重要性を医学生に教えている大阪大学の取り組みや、初学年から看護実習、また卒業後研修まで視野に収めた継続的な看護安全教育に関する島根大学、聖路加国際病院、昭和大学保健医療学部看護学科/昭和大学病院、健康科学大学看護学部の実践例は、特に注目を引く内容であった。

もちろん、例年どおり医療の質・安全に関するオーソドックスなテーマも取り上げられ、転倒・転落の防止の取り組みや、Team STEPPS、WHO 患者安全カリキュラムガイドに関するセッションも設けられた。また、学術集会と同時に、あるいは前後して、医療事故調査に関するセミナーや医療安全管理者ネットワーク会議も開催された。やはり、医療の質・安全学会が医療安全に関する実務、研究、行政、業界のプラットフォームとしての役割を果たしていることが益々明確となってきたといえる。

2018年も、11月開催の年次学術集会はもちろんのこと、アドホックにその都度医療安全に関するセミナー等が年間を通して開催されることであろう。医療の質と医療安全に関心を有する多くの関係者にとって有意義な内容であることは想像に難しくなく、関係者諸賢の積極的な関与を勧めたい。